

一宮町が東浪見村と合併したのが昭和二十八年十一月三日、ちょうど今年が十年目に当たっている。これを記念して、「一宮町史」を作っては、との話が急に持ち上った。それが本年の一月初旬、そうして十一月の記念日までに作り上げようというのである。

私は、町長からこのお話を受けたとき、そんなすくない期間では無理だろう、と一応お断りした。

ところが、その後当町在住の上田 広氏がお見えになり、町長からつよく依頼されたのを機に、やってみようではないか、とのお話があった。その際も私は、あまりにも時日の不足なのを訴えるよりしかたがなかった。

しかし、さらに上田氏に、確かに時間はないが、今がチャンスではないか、この儘では、資料も散逸するばかり、そのうえ昔のことを知っている人は段々減るし、かりに将来時日と費用ができて、町史の編さんはいっそう困難になるだろう、といわれ、私もやはり考え直さないとわけがなくなつた。

そればかりでなく、私は上田氏のような人が、無理を承知で町のためにやって下さることをする時がチャンスで、もし私がかたくななことを言つて、同氏に今後協力しないとでも言われたら、いったいどうなるだろう。

上田氏は、皆さんも御承知のとおり、火野葦平氏と並び称された作家であり、この人が骨を折って下さるといふ時こそ、無理をしてもやるべきだ、と私も考え直したわけである。そして、さっそく友人達に相談したところ、出来るだけやってみよう、ということに

なつた。委員会の発足したのが一月二十七日、それから回覧板や有線放送を通じて、町内の皆さんに資料の提供をお願いするやら、委員が町外に調査に出かけるやらする仕末であつた。

たまたま二月に入つて、加納千葉県知事が職務に倒れ、つづいて逝去、本葬、県民葬、一宮町の追悼式等のごとがあり、それが終つた途端、私が交通事故に遭つて二ヶ月余治療を受けるような事態が起り、そのうえ現在でも歩行が充分でないため、資料の蒐集や調査に出られない有様で、役目が果せなかつたことが誠に申訳ない。

委員の諸氏は、多忙な業務のかたわら、資料を集めて執筆するのであるが、原稿の締切に追われるため、資料がまとまらないうちに執筆し、後で資料が出るとそれを追加するという無理なやり方をした。

そのため副委員長の田中定治氏は、口癖のように、町史を書き終らないと、酒を呑んでも味が無い、といつておられたが、その苦勞は並大抵ではなかつた。こうして出来た原稿は、委員全体で検討するいとまもなく、印刷所へ廻さなければならぬ状態で、委員達が異口同音に、時間があればなあ、と言つているとおり、随分無理な編さんであつた。

一宮町は古い歴史をもつた由緒のある町だけに、調べれば調べるほどよい資料があらわれる。それを調べつくすことなく、時日の制約のために完全なものづくり得なかつた点、ご諒察願いたい。なお、委員会は、かなり大きな年表の作製を心がけていたが、予算

(頁)の都合でこれに収録することができなかった。今後もしゆるされるなら、いつそ正確を期して別冊をもって刊行したいと思つている。

この町史の編さんに当つては、町内の皆さんのご支援のほか、多くの専門大家のご指導とご執筆をいただいた。

今井福次郎(文学博士、千葉県文化財専門委員)、梶原昌夫(県立千葉図書館、元一宮商業高等学校長)、川村優(千葉県史編さん係長)、郡司勇(千葉県文化財係長)、島田貞一(船橋図書館長)、須々木不二(大森区史編さん委員)、白鳥芳郎(文学博士、上智大学教授)、高橋在久(千葉県文化財主事)、林天然(郷土史家)、平野元三郎(千葉県文化財主事)、村崎勇(千葉県民俗会々長)、吉田章一郎(上智大学講師)、吉村茂樹(文学博士、上智大学教授)、江沢中葉(郷土史家)、海保四郎(九十九里史学会々長)、佐久間珣甫(史家)、篠崎四郎(考古学者)、志田一郎(千葉カントリイ倶楽部)、高石真五郎(毎日新聞顧問)、県立図書館郷土室係の諸先生である。ここに深く感謝の意を表したい。

最後に私は、将来この町史の及ばなかつたところを補い、さらによい「一宮町史」のできることを、心より念願してやまないものである。

昭和三十八年十二月二十二日
編さん委員長 中村 正紀

一宮町史

昭和三十九年二月二十五日 印刷
昭和三十九年三月 三日 発行

編さん者 一宮町史編さん委員会

発行所 一宮町 役場

千葉県長生郡一宮町
電話(二宮)二二・二四九番

発行者 近藤 三郎

印刷者 柴田 賢次郎

印刷所 日東出版社

東京都新宿区矢来町二二六